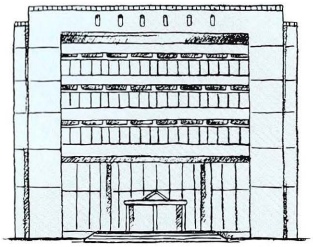
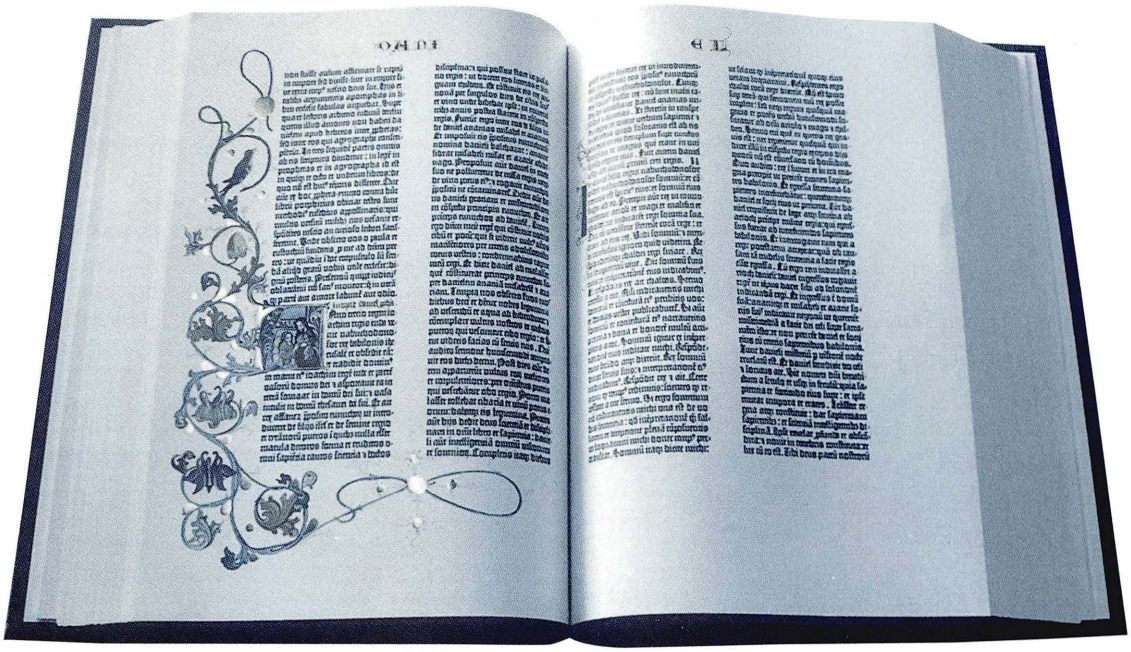
ISSN 1344-5642

西南学院大学



図書館報

No. 150
2001.5



グーテンベルク42行聖書（復刻版）
〈旧約書：ダニエル書〉

目次

21世紀をどう生きますか　図書館長 古賀 衞　2

特集：図書館へのいざない

図書館は知のワンダーランド
神学部 助教授 須藤 伊知郎　3

英米文学選定図書コーナーについて
文学部（英文学科） 教授 酒井 三千穂　3

図書館をもっと身近に！
文学部（フランス語専攻） 教授 武末 祐子　4

理数系教員からの読書のすすめ
文学部（児童教育学科） 教授 安楽 和夫　4

図書館「探索」のすすめ
文学部（国際文化学科） 助教授 佐藤 千登勢　5

社会福祉を学ぶにあたって
文学部（社会福祉学科） 教授 堺 太郎　5

新入生へ図書館利用のすすめ
商学部 教授 伊藤 龍峰　6

図書館彷徨のすすめ
経済学部 助教授 花田 洋一郎　6

たとえ本文を読まなくても
…見出し読みのすすめ
法学部 助教授 勢一 智子　7

図書館 きのう、きょう、あした
元図書館整理課 品川 壽子　7

お知らせ・編集後記　8

21世紀をどう生きますか

図書館長 古賀 衞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんは21世紀最初の入学生です。皆さんは、これから４年間の学生生活を経て社会に出ます。そして、約50年間現役として働くことになります。

50年前の1951年は、日本が戦後の占領から独立した年です。それから今まで、私たちは社会の急激な変動を見てきました。これからは、もっと激しい変化が起こるかもしれません。皆さんは、そういう時代を生きようとしているのです。

今は厳しい不況が続いています。仕事に就くためにじっくりものを考える余裕など無いのかもしれません。皆さんは急激な社会の変化に驚き、時代の波に流されるだけかもしれません。就職活動のために目の色を変えている先輩たちの姿を見れば、社会の影の深刻さは分かるでしょう。それは、この時代の姿であり、皆さんはこの現実から逃げられないのです。どうせ逃げられないのなら、時代に背を向けるより、これからの世界をしっかりと捕まえたいと思いませんか。社会に流される前に社会を飲み込んでしまいましょう。そのための力、それが大学で身につけるものです。

～•～• ＩＴと文科系大学 •～•～

21世紀は、ＩＴとか遺伝子技術といった情報工学に関連する言葉で始まりました。これらは理科系の「専売」のように見えますが、それらの技術が人間社会に浸透し定着する段階では、私たちの研究対象となってきます。新しい技術で作られたものが人間の生活に取り入れられるには、既存の制度や価値との調整が必要になります。文科系の学問は、まさにそのような切り口で先端技術と関わっているのです。

図書館も新しい時代に対応するための努力を始めています。もう少しＩＴ革命が進んでくると、コンピュータは特別なものではなくなります。そして、どこででもコンピュータで見たい資料を見ながら、ものを考えることができるようになるでしょう。その時に向け、図書館では今年から実験的にＳＡＩＮＳルームとは別に、自分のノートパソコンを使いながら参考書で勉強できるコーナーを設けます。欧米の大学では当たり前の光景ですが、コンピュータと既存の図書の併用は、文科系の学問分野でも当然の学習方法となりつつあります。皆さんの利用状況を見ながらこのコーナーを広げたいと考えています。積極的にご利用ください。

欧米の大学と比べて、日本の大学はハード環境だけでなく、それによって利用される情報源の整備が非常に遅れています。ＩＴ革命は、コンピュータとか周辺機器を揃えるだけではなく、提供される情報源やソフトウェアの開発が不可欠です。本学ではまだハード面の環境が整ってきたばかりですが、欧米と伍していくには情報源の拡充に同じ位の力を注ぐ必要があります。図書館では、マルチメディアへの対策として、データベース整備のための概念設計を検討中です。皆さんが３年生になって大学生らしい研究課題を持つころには、本格的なＩＴ環境を提供したいと思います。

～•～• 利用する立場に立って •～•～

本学の図書館は、午後９時まで開いていることや利用者のためのサポート体制がしっかりしていることなどで、学外からも高い評価を得ています。２階の国際機関資料室は、国連寄託図書館、ＥＵ資料センター、ＯＥＣＤ協力資料館と国際協力プラザの４機関を統合したもので、これだけの資料を１箇所に集めているのは全国で２大学しかありません。一次資料で世界のことを研究するには、絶好の環境が用意されています。

さらに、今年７月ころから就職情報図書のコーナーを設けます。国家資格試験とか公務員採用試験のための案内書や問題集のほか、皆さんが将来どんな仕事をしたらいいか、そのためにはどんな勉強をするべきか、を考えるための資料を揃えたいと思っています。持ち続けていれば、夢は必ず実現するものです。そのためのヒントがこのコーナーで見つかるかもしれません。

もちろん、図書館は広い分野を対象に、深く研究する人のための材料を提供する場です。だから、そのために必要な図書をできるだけたくさん揃えて、一人一人のニーズに応えることが本務です。今は就職難の時代で、就職試験のための面接の受け方などを指導している大学も増えているようですが、この数年の結果を見ると、そのような小手先のテクニックでは企業はごまかされません。やはり、大学時代を充実して過ごし、自分に「何か」を身につけた人が評価されます。

目先のテストのための勉強なぞは高校時代で終わりにして、大学では楽しく打ちこめる「研究」に熱中してみませんか。その経験は、皆さんが21世紀を生きる上で必ず助けとなるでしょう。図書館は、その役に立ちたいと入口を開けています。　（法学部 教授）

特集『図書館へのいざない』

図書館は知のワンダーランド

神学部 助教授
須藤 伊知郎

神学部の講義で聖書の本文の研究について次のような話を聞いたとする。「現在私たちが手にしている聖書の日本語訳の底本となった原典は、残念ながら原本は残っていない。底本の本文は、手書きで写したいくつもの少しずつ違った古い写本を比較検討して、これがオリジナルに最も近いだろうと判断した読み方を選んで再構成したものである。その重要な古写本のひとつにシナイ写本がある。」

これをもっと詳しく図書館で調べてみよう。まず、OPAC でキーワードに「聖書」「本文」を入力して検索すると10冊ヒットする。最初に出るのが、「新約聖書の本文研究／B. M. メツガー著；橋本滋男訳－東京：日本基督教団出版局，1999」である。所在は開架２階で、請求記号は194/513/Me89sH だ。そこで２階に行って手に取ってみる。巻頭にいろんな写本の写真があってなかなか面白そうだ。後の索引で「シナイ写本」について書いてあるところを捜すと、スパイ小説顔負けのシナイ写本発見の物語が載っている（ここでは種明かしはしない）。

さて、西南に聖書の写本について何か資料がないか、さらにインターネットで検索してみる。Yahoo などの検索サイトで「写本 聖書 西南学院大学」を捜すと、「西南学院大学キリスト教資料展示コーナー」（http://www.seinan-gu.ac.jp/rad/museum97.html）がヒットする。このページを見ると「シナイ写本」も挙がっていて、なんとこの複製がそこに展示されていることが分かる。実はこのコーナーは図書館１階入ってすぐ右にある。これは見ない手はない。

早速行ってみると、きれいなシナイ写本のファクシミリが展示してある。解説には「ドイツの神学者 K. Tischendorf が、シナイ山の聖カタリナ修道院を３度調査して発見した（1844、1853、1859）、ギリシア語大文字体で書かれた紀元４世紀の写本。」とある。ギリシア語を勉強した神学部生は、大文字だけで書かれたこのシナイ写本の本文を実際に拾い読みしてみると面白いだろう。

図書館は知のワンダーランド、好奇心を誘う刺激に満ちている。何でも分からないことがあったら、まず図書館で調べてみよう。

英米文学選定図書コーナーについて

文学部英文学科 教授
酒井 三千穂

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。そろそろ、大学とはどういう場所なのか、それぞれの人が何となくわかってきた頃ではないかと思います。自分の学生時代を振り返ってみると、１週間位ならば、パンと水だけ持って図書館に閉じ込められたいと半ば本気で思ったことが、私にはあります。出身大学の小さな図書館は、設備も蔵書も乏しかったのですが、その片隅にあった小説類に読みふけり、それまで知らなかった様々な世界が自分の中に広がっていく時、とても幸せだったからです。

英文学科では、１年生を対象とする「イギリス文学概説」と「アメリカ文学概説」の授業が開かれています。英米文学を学んでいく上での土台作りが授業の目的なのですが、そのような授業を担当するといつももどかしい思いがします。小説の場合、作品について説明することはできても、授業中に作品そのものに直接接してもらうことはほとんど無理だからです。しかし、作品についての知識よりも、「その作品を読んで、私はどう感じるのか」が文学を学ぶ時の出発点である以上、やはり、一人一人が自分で直接に作品をよむことが不可欠です。

そこで、英文学科ではイギリス文学とアメリカ文学の代表的な作品を中心に「英米文学選定図書」のリストを作成し、そのリストに載せた図書の原書と翻訳とを置いた「選定図書」コーナーを図書館の４階に作って頂きました。図書館に行ったら、そこの本棚の前に立ち、翻訳でいいですからまず手に取ってみてください。イギリス文学では、シェークスピアの戯曲、『ロビンソン・クルーソー』『宝島』『嵐が丘』など古典とされている作品から現代の作品まで、アメリカ文学でも、ポーの推理小説や『ハックルベリー・フィンの冒険』などの19世紀の作品から現代の作品まで、限られたスペースの中ですが、並んでいます。どういう作品から読んでいけばいいのか分からない１年生が、英米文学の入り口として利用してもいいし、上級生が授業で学んだ作品の確認のために利用してもいいのです。

図書館は、利用の仕方の次第では、たくさん楽しめてどきどきする場所です。充実した学生生活を過ごすためにも、なるべく早めに図書館の「探検」をし、自分にとっての図書館を発見されることをお勧めします。

特集『図書館へのいざない』

図書館をもっと身近に！

文学部外国語学科フランス語専攻 教授
武末 祐子

年間を通じて図書館に学生が出入りするのは、試験前とレポートの課題が提出されたときというのは私だけの印象でしょうか。それでは図書館が日常生活と離れ過ぎていて、ますます縁遠くなるのは否めないでしょう。

新入生の皆さんに是非知ってもらいたいのは、3階のパソコン室と1階及び各階にある図書検索機、それに1階の新聞、雑誌、ビデオコーナー、2階にある洋雑誌コーナーです。そしてなんといっても図書館の強みは、新聞、雑誌にバックナンバーがあることです。

1996年以来、ヨーロッパだけでなく世界を震撼させている狂牛病（vache folle）に続いて、昨年またもや英国発の口蹄疫（fièvre aphteuse）が紙上をにぎわせているのは御存じの通りですが、日本の紙上にあまり登場しないこれらの情報は、パソコンや洋雑誌でかなり入手できます。フランス語では、日刊ルモンド（Le Monde）（http:/www.lemonde.fr/）や週刊 L'Express、一年生でも読めるようになる青少年向けの Les Clés de l'actualité などで、フランスでの実情がわかります。新聞でできないことで、インターネットでできる便利なことは、例えば、口蹄疫関連記事が、dossiers とか archives といった項目でそれまでの全記事がまとめて分類されているし、その日のニュースにわずかの記事しかなかったとしても、リンクが多様で、口蹄疫とは何かという頁から、世界の感染状況、ワクチンの効用の有無など、あらゆる頁にアクセスできることです。

また、お馴染みの Paris Match や Elle のほか、図書館ではフランス映画をビデオや LD で見ることもできます。最新の映画というより、往年の名画が多いかもしれませんが、無料で見たいだけ見られます。文学の名作が映画化されたものは、原書、訳書、ビデオ、映画誌（Cahier du cinema）などで横断的な楽しみ方をするのもお勧めです。

もちろんこの他に、フランス文学、語学、辞書、教科書類は必要なものが揃っています。1941年発足の百科全書精神に則った知の叢書クセジュ文庫の日本語版（2F）など、是非一度は手に取ってみるべきでしょう。

このように図書館をもっと身近に、2日に一度は立ち寄ってみるコンビニのように活用して、皆さんの知の枠組みを広げていただきたいと思います。

理数系教員からの読書のすすめ

文学部児童教育学科 教授
安楽 和夫

3年ほど前から電車通勤することになり、往復1時間近くを電車の中で過ごすのが日課となりました。それまで自分の研究テーマと関連の薄い本にはなかなか手が届かなかったのですが、お陰でいろいろな本を読む機会ができ、逆に、今まで本をもっと読んでおくべきだったと反省することしきりです。入学生の皆さんも、ぜひ今のうちに多くの本に触れて、いろいろなことに興味や関心を持っていただきたいと思います。

さて、一般教養や所属学科に関連する本の紹介をということでしたので、思いつくままにいくつか挙げさせていただきます。まず、私の研究テーマに関連する確率・統計の読み物として、ダレル・ハフ『確率の世界』、『統計でウソをつく法』（ともに講談社ブルーバックス）は確率や統計の考え方や見方を、わかりやすく軽妙に説いてくれます。確率や統計についての認識を新たにしてくれるかもしれません。また、一松信『暗号の数理』（講談社ブルーバックス）は暗号の歴史や、公開鍵暗号の基本的な考え方などについて解説してあります。ブルーバックスシリーズは、数式なども出てきて、軽い読み物とは言えないかもしれませんが、一般向けの本ですので、このような本から伝わる雰囲気も味わってみてはいかがでしょうか。

サイモン・シン『フェルマーの最終定理』（新潮社）には、300年以上も未解決の問題を解決した数学者のことが描かれています。この問題に日本人数学者が大きな役割を果たしたこともちゃんと評価してあります。また、身近な数学の問題を例に、数学と科学の相違点などについてもわかりやすく解説してあります。

カオスやフラクタルに関連して、J.ブリッグス・F.D.ピート『鏡の伝説』（ダイヤモンド社）はたいへん興味深い本でした。一読されると、自然科学への興味をかき立てられるかもしれません。明治の物理学者であり、名文家として知られた寺田寅彦の随筆集『寺田寅彦全集』（岩波文庫）にもカオスなどに関連する話が出てきてびっくりします。これもお勧めの古典です。

最後に、教育問題に関連して、大野晋・上野健爾『学力があぶない』（岩波新書）は、教職を志望している人に限らず、ぜひ読んでいただきたい1冊です。

とりとめもなく挙げましたが、まだ若いみなさんですから、専門にあまりこだわらず、興味をかき立てられるような本を幅広く読まれてはいかがでしょうか。

特集『図書館へのいざない』

図書館「探索」のすすめ

文学部国際文化学科 助教授
佐藤 千登勢

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから4年間という長い大学生活のなかで、いろいろな目的で図書館を利用されることになると思います。試験勉強、レポートや卒論の文献探し、指定図書の閲覧はもとより、授業の合間に新聞や雑誌を読んだり、ビデオや CNN を見たり、友達との待ち合わせの場所にしたり、あるいは SAINS ルームでパソコンを使ったり、実に様々な目的で図書館に来ることになるでしょう。とにかく西南に限らずどこの大学でも図書館は学生が在学中、多くの時間を過ごす空間であり、また卒業してから久しぶりに母校を訪ねた時、学生時代を懐かしく思い出す場所にもなります。

大学図書館の賢い活用方法は、ひとそれぞれ違います。というのも大学で何を学びたいのかは、ひとりひとりが決めることであって、ひとそれぞれ違いますから、何かマニュアル的に図書館の活用の仕方を説明することは、ほとんど意味がありません。新学期には各学部・学科での図書館ガイダンスが行われますから、まずそこで一般的な図書館の利用の仕方 — OPAC の使い方、参考書や辞典類の場所、開架図書の基本的な分類、雑誌や定期刊行物の探し方、閉架図書の請求方法など — を教えてもらった後、自分の興味に沿って図書館を「探索」してみることをお勧めします。そして何かわからないことがあったら、図書館の職員に尋ねてみてください。「知らぬは4年間の恥」です。なるべく早いうちに聞いてしまいましょう。

以前、ある学生がレポートの相談に来た時、「西南の図書館にある本で関連のありそうなものは一応全部調べてみました。」と言うので、どのように文献を探したのか尋ねてみました。するとその学生は、図書館の書棚に行って、上から下まで書名を見て使えそうな本を選びましたと答えたので、私はほとんど椅子から転げ落ちそうになるほど驚きました。その人は、大学に入学して3年もの間、OPAC での検索の仕方も知らなければ、閉架図書の存在も知らず、開架図書が図書館の蔵書のすべてだと思い込んでいたのです。高い学費を払いながら、これでは本当に「宝の持ち腐れ」です。みなさんはくれぐれもこのようなことがないよう、できるだけ早く「知識の宝庫」である図書館を自分にとって居心地の良い空間にして下さい。

社会福祉を学ぶにあたって

文学部社会福祉学科 教授
堺　太郎

社会福祉について専門的な学びを進めていくと同時に、豊かな社会福祉的センス（社会福祉的なものの考え方が出来る）を養っていく必要があります。特に、社会福祉実践においては「福祉の心」について問われます。この「福祉の心」について考えていくための、恰好の図書があります。それは「福祉の思想」糸賀一雄著、と「日本人の福祉“やわらかな心を求めて”」若城希伊子著、いずれも NHK ブックスです。前者は知的障害者の教育、福祉実践による筆者の考えから福祉に携わる者の根本精神について学ぶことができます。後者は日本の救済事業や社会福祉事業に尽くした人々の思想とその働きを学び、現代社会における社会福祉の現状についての視点を与えてくれます。

岩波新書から三冊紹介します。一つは「障害者は、いま」大野智也著です。この本は現代社会における障害者福祉問題について学ぶことができます。二つ目は「豊かさとは何か」暉峻淑子（てるおかいつこ）著です。この本は旧西ドイツの国民の生活とわが国の生活とを比較して、真の豊かさとは何か、豊かな生活とはどのような生活内容をいうのか等知ることができ、私たちの現在の生活の在り方について考えることができます。三つ目は「高齢者医療と福祉」岡本祐三著です。この本は高齢者の介護問題、医療問題等の現代的課題とそれに対応する福祉や医療対策の実情について学ぶことができます。

次に「福祉の心と出会い」大塚達雄著（ミネルヴァ書房）を紹介します。同志社大学教授であった著者の障害を持つ子どもたちとボランティア、住みよい街づくりなど、著者の関わってきた福祉実践のあゆみを通して福祉の心を描いたものです。

ボランティア関係の図書を紹介します。「福祉の心」阿部志郎著（海声社）です。この本は著者の講演集で、内容は福祉の心、ボランタリズム、共に生きる、いま福祉がかかえるもの、から成っています。横須賀キリスト教社会館館長、わが国における地域福祉実践及び研究の第一人者としての、著者の福祉論を学ぶことができます。もう一冊は「在宅福祉とボランティアーふくしのまちづくりー」巡静一編著（勁草書房）は分かりやすい実践例があります。

特集『図書館へのいざない』

新入生へ 図書館利用のすすめ

商学部 教授
伊藤 龍峰

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。この図書館報が発行されるのは5月末の予定ですから、すでに入学して2ヶ月が過ぎ、大学生活にも大分慣れてきた頃だと思います。皆さんは、この2ヶ月間で図書館へ何度足を踏み入れましたか。一度もないという人がいるのではないでしょうか。

他大学で教員をしている私の友人が、新入生を評して、「受験終了のときから入学式までの間にそれまで蓄えていた知識をきれいに初期化して学生は入学してくる」と冗談交じりに、半ば呆れ気味に言ったことがあります。彼は初期化をメモリーのリセットという意味で使ったのでしょうが、初期化は、新しい作業を可能とするための状態という意味が本来の意味だと思われます。皆さんたちの初期化された頭にこの2ヶ月間で何をインプットしましたか、あるいは、これから何をインプットしようと考えていますか。

図書館は情報の宝庫です。皆さんが必要とする情報は揃っているはずです。もちろんどのような図書館であっても、たとえ国立国会図書館のような大規模な図書館であったとしても、すべての情報を完璧に揃えておくということは不可能です。そのため本学の図書館も相互にネットワークを張り巡らし、必要な情報は他の図書館から取り寄せて利用できるように便宜を図ってくれています。ただ情報に対する私たちの欲求には鮮度みたいなものがあり、そのときに見つからないと読みたい気持ちがいつしか萎んでしまうこともあります。そのためにも本学の図書館が充実していることに越したことはありません。大学の評価基準の一つとして、図書館の充実度をあげることができますが、本学は、その意味からしても高い評価が得られるのではないかと思います。

頭は記憶媒体としてだけに使うものではないことは言うまでもありませんが、皆さんが、初期化された頭に多くの情報をインプットしたいと考えたとしても、本学の図書館はそれに十分対応できるはずです。キャンパスが人と人との出会いの場であるように、図書館は人と情報との出会いの場です。この場所で未知の情報と出会う静かな時間を過ごしてみませんか。インプットした情報の蓄積が、きっとあなたの将来を豊かにする知恵を生み出してくれるはずです。

図書館彷徨のすすめ

経済学部 助教授
花田洋一郎

かつて本を読むことは知的でかっこいいことと見なされ、男も女も読書することにある種の満足感とプライドをもっていた。しかし最近、読書はかっこいいものではなくなってしまい、読書家は時に変人扱いされる御時世となってしまった。

そんな中で、新入生の諸君に図書館を積極的に利用するよう促すにはどうすればよいのだろうか。わたし自身が自分の体験から言えることは、次の1点のみである。すなわち図書館の1階から4階まで整理・配架された本を、あたかもウィンドウ・ショッピングをするかのように、ゆっくりと眺めて歩くことである。辞書・地図類から文学・自然科学の書物まで、そこに並べられたさまざまな本の背表紙を片っ端から見てゆくと、いくつか興味を引かれる本が見つかるだろう。その本を手に取り、もし期待を裏切られたら元に戻し、またぶらぶらと歩く。書店で立ち読みをするような感覚でよいのである。

何か面白そうな本が見つかったら少し読んでみる。読み進んで行くと、時々全く別の分野に興味がわいてくることがある。ある分野について調べてゆくと、意外な分野に関心が移ったりする。勉強とは本来そういった浮気的なもので、ふらふらといろんな分野を漂いながら知識が蓄積されてゆき、新しい発想がふと生まれる、といったものだと思う。

外見、性格、身体的能力など、人間の魅力をはかる尺度はさまざまであるが、好奇心の強さも重要なファクターである。知識の豊かさは、とりわけ欧米社会では人物評価の重要な要素であり、かつての日本もそうであった。今後の日本はそういった人材を再び求める時代に入ると思う。豊かな知識を持った読書家は、やはりかっこいいのである。

そこで新入生及び在学生の諸君には、まずは手当たり次第に「知る」ことから始めて欲しい（もちろん、「知る」ことがもたらすマイナス効果も存在するが、それを実感するにはやはり「知る」しかない）。知識に優劣はない（偏差値の立ち入る隙もない）。とりたてて知りたいものがなければ、とりあえず図書館をぶらついてみてはどうだろうか。4年間で何か見つかればしめたものである。たとえすぐに見つからなくても焦ることはない。それはそれで幸せなことなのだから。

特集『図書館へのいざない』

たとえ本文は読まなくても
……見出し読みのすすめ

法学部 助教授
勢一　智子

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

大学入学とともに専門的な勉強が始まっていることでしょう。例えば、法学部では、様々な法律の制度や理論、数多くの裁判事例を学びます。その際これまで読んだことのない専門雑誌に定期的に接することになるでしょう。代表的な法律専門雑誌には、総合誌として、ジュリスト、法律時報、法学教室、判例誌として、判例時報、判例タイムズなどがあります（総合誌は図書館２階の学術雑誌コーナーで手にすることが出来ます）。

しかしながら、このような専門誌に親しんでいる新入生は多くはないでしょう。それらには見慣れない専門用語が多用されており、初学者が通読するのは容易ではありません。そこで、まだ法律への抵抗感を解消させていない方にちょっとしたヒントをご紹介しましょう。まずは主要雑誌の見出しをチェックすることから始めてみてはいかがでしょうか。こうした雑誌の表紙には、掲載記事のタイトルと執筆者名が列挙されています。それを定期講読するわけです。

イメージしてみてください。もし音楽やファッションなど趣味の雑誌なら、毎号どのような記事が掲載されているかチェックしているのではないでしょうか。そして、そのような情報収集を続けることによって、業界の動向や世の中の流行が見えてくるでしょう。それと全く同じことです。例えば、リサイクルや循環型社会という用語を頻繁に見かけていたら、家電リサイクル法や循環型社会形成推進基本法が制定され、テレビや冷蔵庫の回収処理が有料化されています。あるいは、行政改革や省庁再編という見出しが多くなっていたら、国の行政機関である中央省庁が大幅に改編され、国土交通省や環境省などが登場したりするわけです。このように、政策や法制度、学界のトレンドを知ることができますし、また、ときには関心を持つ記事に出会い、興味をそそられることもあるでしょう。それこそが大学での勉強の自由さとおもしろさです。

同様の方法は、新聞やインターネット情報などにも応用可能です。見出し読みは、時間的にはわずかなことですが、継続することにより、社会動向への感受性を豊かにすることができ、それは社会科学を学ぶ上で不可欠な能力になります。新しい知識と学問の習得に向けて、小さな工夫を始めてみませんか。

図書館
きのう、きょう、あした

元図書館整理課
品川　壽子

私が図書館の仕事に就いたのは1960年、当時の大学は１号館、チャペル、学術研究所（西側が図書館）の建物だけで、とても松の緑が濃いキャンパスでした。

当時の図書館を取巻く環境はアメリカのすぐれた図書館の制度や活動が認識され、長い間書物の保存機能であった図書館が「保存から利用へ」と大きく方向を変えた時期でした。

本学図書館も現在の大学院のある場所に1954年鉄筋コンクリート３階建ての開架式図書館として新築され、当時としては時代の先端をいったもので、珍しがられ訪問者が絶えなかったようです。現在の図書館は1968年に建設され、1993年情報化時代に対応する図書館としてリニューアルされ、コンピュータシステムによる本格的なサービスが開始されました。

図書館のイメージといえばいろいろあるけれど、ロビーいっぱいのカードケースの中に並んだカード目録でしょう。以前の図書館の仕事といえばすべて手作業で分類や目録作業をしていました。現在のように図書館の仕事がコンピュータで処理されるなど、その当時想像もできないことでした。しかし図書館の機能を生かすために情報の蓄積、検索を機械で処理する方法が検討されるようになり、1986年文部省の学術情報センターが目録所在情報サービスを開始すると、目録システムを利用することが出来るようになりました。1989年には本学図書館にも図書館システムが導入され、コンピュータでの図書館業務ができるようになり、データベースの検索機能を利用することでカード目録の作成を廃止しました。その情報はホームページを通して、何時でも何処からでも利用することができます。資料の全文検索がもっと可能になれば、利用者は図書館に来ることなく自宅から情報を得ることができるようになるでしょう。パーム（システム手帳のようなもの）にインターネット上で公開されている書籍のテキストを読みこませて、通勤の電車やバスの中で文庫本のように読むことができる時代です。図書館はいらない？図書館にはサーバー機だけが並んでいる、そんな未来図も描けそうです。

今年１月、情報技術（IT）基本法が施行され、政府は５年以内に世界最先端の IT 国家を目指すといっています。情報量もその形態も急激に高度に変化していくことになるでしょう。でも、このような情報化時代だからこそ自ら考え解決していく力が必要です。外からの情報は次々に手に入るけれど、その

情報を選択する力がなければ、肝心の情報はなんの役にもたちません。受けた情報を正しく判断し、生かす力を身につけることが求められます。図書館では、エジプトを旅してスフィンクスと対話したり、エジソンになって発明発見も思いのままです。この想像と思索こそ、自己を確立する最大の効果であると思います。

今後、図書館にはますます多様な形態の情報が集まり、同時に利用者に資料（情報）を発信することになるでしょう。図書館の今後の発展を期待しています。

（品川壽子さんは、本学図書館に40年６ヶ月勤務され、今年３月末で定年退職されました。）

お知らせ

◎入館システムを変更

図書館の入館システムを４月から変更しました。学生証に貼付しているバーコードがエンコードに変わっています。まだ図書館に入館してない学生は、試験期にまごつかないよう、早めに慣れておきましょう。

◎外国語学科英語専攻の Extensive Readings 図書について

これらの図書は、「特色ある学科のための教育」のひとつとして用意されたもので、４階の書架にレベル毎に配架しています。英語専攻の学生は大いに利用してください。

◎「指定図書」について

２階の指定図書コーナーに配架しています。コーナーの図書は貸出できませんので、貸出は一般配架の複本を利用してください。なお、指定図書と複本は試験前には利用が混み合いますので、余裕をもって利用しましょう。

◎教育実習用・卒業論文用資料の長期貸出

教育実習や卒業論文作成に使用する資料は、通常の貸出とは別に長期の貸出ができます。教育実習用は５冊40日間、卒業論文用は５冊30日間です。カウンターでその旨申し出てください。

◎夏季休暇貸出の実施

夏季休暇のため長期の貸出を実施します。

受付開始　６月21日（木）
返却期限　９月５日（水）
貸出冊数　５冊以内

◎館内複写機の利用について

著作権等に留意して責任をもって複写してください。また、複写にはコピーカードを購入してください。なお、カラーコピーは料金（現金）を添えて１階カウンターに申し込んでください。

◎携帯電話などの注意事項

館内での携帯電話、PHS などの使用は禁止です。入館の際、電源 OFF かマナーモードにすること。他の利用者へ迷惑にならないようお互いにマナーを守りましょう。

《ＥＤＣセミナー開催》

EU 資料センターが日本で最初に設置されたのは本学ですが、標記のセミナーが５月24日（木）・５月25日（金）に駐日欧州委員会代表部広報部長のＴ．マクグラス氏を迎えて本学で開催されました。国内の16大学、３関係機関から25名が参加。また、氏による学生および一般参加者を対象とした講演会も催されました。

《図書館委員会》

４月６日（金）
議題　①2001年度私大助成申請および高額図書購入申し込みについて
②神学部の私大助成・高額図書申し込み順位について
③2001年度大学図書館補正予算申請について
④2000年度大学図書館決算について

５月９日（水）
議題　①2001年度各部門の共通研究図書費、一般図書費および新聞雑誌費の配分について

編集後記

中坊公平氏の講演を聞く機会があった。老体で小さな体躯ながらバイタリティ溢れる、戦う弁護士の姿があった。若い新入生の皆さんも「知」や「知ること」に対して、興味と探求心とバイタリティを持って、これからの４年間を過ごしてほしい。図書館は皆さんの利用を待っています。　（田）

西南学院大学図書館報　No.150　2001（平成13）年５月31日　発行
編集　館報編集委員会
発行　西南学院大学図書館　〒814-8511 福岡市早良区西新６丁目２番92号　ＴＥＬ（092）823-3426